

芥川龍之介 作品集

目次

羅生門……………3

或る阿呆の一生……………10

羅生門

ある日の暮方の事である。一人の下人^{げにん}が、羅生門^{らしやうもん}の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々^{ところどころ}丹塗^{にろう}の剥げた、大きな円柱^{えんちゆう}に、蟋蟀^{きりぎりす}が一匹とまっている。

羅生門^{すざくおおじ}が、朱雀大路^{すざくおおじ}にある以上は、この男のほかに、雨やみをする市女笠^{いちめがさ}や搦烏帽子^{もみえぼし}が、もう二三人はありそうなものである。それが、この男のほかに誰もいない。

何故かと云うと、この二三年、京都には、地震とか辻風^{つじかぜ}とか火事とか饑饉^{うきう}とか云う災^{わざわい}がつづいて起った。そこで洛中^{らくちゆう}のさびれ方は一通りではない。旧記によると、仏像や仏具を打碎^{うちくだ}いて、その丹^にがついたり、金銀の箔^{はく}がついたりした木を、路^{みち}ばたにつみ重ねて、薪^{たきぎ}の料^{しやう}に売っていたと云う事である。洛中^{らくちゆう}がその始末^{しまつ}であるから、羅生門^{らしやうもん}の修理などは、元より誰も捨てて顧^{かみ}る者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸^{こり}が棲^すむ。盗人^{ぬすびと}が棲^すむ。とうとうしまいに、誰引取り手のない死人^{しにん}を、この門へ持つて来て、棄^すてて行くと云う習慣^{しやうへん}さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも氣味^{きみ}を悪^{わる}るがって、この門の近所^{かんと}へは足^{あし}ぶみをしない事になってしまったのである。

その代りまた鴉^{からす}がどこからか、たくさん集^あつて来た。昼間見ると、その鴉^{からす}が何羽となく輪^{りん}を描^えいて、高い鷗尾^{しうび}のまわりを啼^なきながら、飛びまわっている。ことに門の上の空が、夕焼^{ゆやけ}けであかくなる時には、それが胡麻^{ごま}をまいたようにはつきり見えた。鴉^{からす}は、勿論^{もちろん}、門の上にある死人^{しにん}の肉^{にく}を、啄^{つば}みに来るのである。——もつとも今日は、刻限^{こくげん}が遅^{おそ}いせいか、一羽も見えない。ただ、所々、崩^{くずれ}れかかった、そうしてその崩^{くずれ}れ目に長い草^{くさ}のはえた石段^{いしだん}の上に、鴉^{からす}の糞^{ふん}が、点々と白くこびりついているのが見える。下人^{げにん}は七段ある石段^{いしだん}の一番上の段に、洗^あいざらした紺^{あお}の襖^{あお}の尻^{しり}を据^おえて、右の頬^ほに出来た、大きな面皰^{めんぽ}を氣^きにしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺^{なが}めていた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようと言う当てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ帰る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微すいびしていた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた」と言うよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれていた」と言う方が、適當である。その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の下人の *Sentimentalisme* に影響した。申の刻下りからふり出した雨は、いまだに上るけしきがない。そこで、下人は、何をおいても差当り明日の暮しをどうにかしようとして——云わばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあつと云う音をあつめて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した甍いらかの先に、重たくうす暗い雲を支えている。

どうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選んでゐる邊はない。選んでいれば、築土つじの下か、道ばたの土の上で、餓死うえじをするばかりである。そうして、この門の上へ持つて来て、犬のように棄てられてしまふばかりである。選ばないとすれば——下人の考えは、何度と同じ道を低徊ていかいした揚句に、やつとこの局所へ逢着ほうちやくした。しかしこの「すれば」は、いつまでたつても、結局「すれば」であつた。下人は、手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来る可き「盗人ぬすびとになるよりほかに仕方がない」と云う事を、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。

下人は、大きな嚏くしゃみをして、それから、大儀たいぎそうに立上つた。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗にぬりの柱にとまっていた蟋蟀せきせつも、もうどこかへ行つてしま

った。

下人は、頸をちぢめながら、山吹の汗疹に重ねた、紺の襖の肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風の患のない、人目にかかる惧のない、一晚樂にねられそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思ったからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗った梯子が眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄の太刀が鞘走らないように気をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子を窺っていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚の中に、赤く膿を持った面皰のある頬である。下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高を括っていた。それが、梯子を三段上つて見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそここ動かしているらしい。これは、その濁った、黄いろい光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、揺れながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。

下人は、守宮のように足音をぬすんで、やっと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体を出来るだけ、平にしながら、頸を出来るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内を覗いて見た。

見ると、楼の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸が、無造作に棄ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるという事である。勿論、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だと云う事実さえ疑われるほど、土を捏ねて造った人形のように、口を開いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上

にころがつていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなっている部分の影を一層暗くしながら、永久に唾おとしの如く黙もくっていた。

下人げにんは、それらの死骸ふらんの腐爛おした臭気おに思わず、鼻を掩おほった。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩おほう事を忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚おを奪うつてしまったからだ。

下人の眼は、その時、はじめてその死骸ふらんの中に蹲うすくまっている人間を見た。檜皮色ひわだいろの着物を着た、背の低い、瘦やせた、白髪頭しろがたまの、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片きざれを持って、その死骸の一つの顔を覗きこむように眺めていた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時さんじは呼吸いきをするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身とうしんの毛も太る」ように感じたのである。すると老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱しじみをとるように、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従って抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えて行つた。そうして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しずつ動いて来た。——いや、この老婆に対すると云つては、語弊ごへいがあるかも知れない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考えていた、餓死うえじをするか盗人ぬすびとになるかと云う問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、餓死を選んだ事であろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片きざれのように、勢いよく燃え上り出していたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。従って、合理的には、それを善悪のいずれに片づ

けてよいか知らなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪を抜くと云う事が、それだけで既に許すべからざる悪であつた。勿論、下人は、さつきまで自分が、盗人になる氣でいた事などは、とうに忘れていたのである。

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上つた。そうして聖柄の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよつた。老婆が驚いたのは云うまでもない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩にでも弾かれたように、飛び上つた。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸につまずきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞いで、こう罵つた。老婆は、それでも下人をつきのけて行くとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合つた。しかし勝敗は、はじめからわかっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへ倒した。丁度、鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘を払つて、白い鋼の色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわなふるわせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球がの外へ出そうになるほど、見開いて、唾のように執拗く黙っている。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されていると云う事を意識した。そうしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。後に残つたのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し声を柔らげてこう云つた。

「己は検非違使の庁の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に縄をかけて、どうしよう云うような事はない。ただ、今時分この門の上で、何をして居たのだから、それを己に話さなければいいのだ。」

すると、老婆は、見開いていた眼を、一層大きくして、じつとその下人の顔を見守った。の赤くなつた、肉食鳥のような、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、ほとんど、鼻と一つになつた唇を、何か物でも嚙んでるように動かした。細い喉で、尖つた喉仏の動いているのが見える。その時、その喉から、鴉の啼くような声が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ伝わつて来た。

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、鬢にしよと思つたのじゃ。」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかな侮蔑と一しよに、心の中へはいって来た。すると、その気色が、先方へも通じたのであらう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪つた長い抜け毛を持つたなり、藁のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんな事を云つた。

「成程な、死人の髪を毛を抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいな事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。現在、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切つて干したのを、干魚だと云うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかつて死ななんだら、今でも売りに往んでいた事である。それもよ、この女の売る干魚は、味がよいと云うて、太刀帯どもが、欠かさず菜料に買つていたそう。わしは、この女のした事が悪いとは思つていぬ。せねば、餓死をするのじゃて、仕方がなくした事である。されば、今また、わしのしていた事も悪い事とは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、餓死をするじゃて、仕方がなくする事じゃわいの。じゃて、その仕方がない事を、よく知つていたこの女は、大方わしにする事も大目に見てくれるであら。」

老婆は、大体こんな意味の事を云つた。

下人は、太刀を鞘におさめて、その太刀の柄を左の手でおさえながら、冷然として、この話を聞いていた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持った大きな面砲を気にしながら、聞いているのである。しかし、これを聞いている中に、下人の心には、ある勇気が生まれて来た。それは、さつき門の下で、この男には欠けていた勇氣である。そうして、またさつきこの門の上へ上つて、この老婆を捕えた時の勇氣とは、全然、反対な方向に動こうとする勇氣である。下人は、餓死をするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。その時のこの男の心もちから云えば、餓死などと云う事は、ほとんど、考える事さえ出来ないほど、意識の外に追い出されていた。

「きつと、そうか。」

老婆の話が完ると、下人は嘲るような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面砲から離して、老婆の襟上をつかみながら、噛みつくようにこう云った。

「では、己が引剥しようと思ひまいた。己もそうしなければ、餓死をする体なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎとった檜皮色の着物をわきにかかえて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。老婆はつぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、梯子の口まで、這って行った。そうして、そこから、短い白髪を倒にして、門の下を覗きこんだ。外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。下人の行方は、誰も知らない。

(大正四年九月)

或阿呆の一生

僕はこの原稿を発表する可否は勿論、発表する時や機関も君に一任したいと思つてゐる。

君はこの原稿の中に出て来る大抵の人物を知つてゐるだらう。しかし僕は発表するとしても、インデキスをつけずに貰ひたいと思つてゐる。

僕は今最も不幸な幸福の中に暮らしてゐる。しかし不思議にも後悔してゐない。唯僕の如き悪夫、悪子、悪親を持つたものたちを如何にも気の毒に感じてゐる。ではさやうなら。僕はこの原稿の中では少くとも**意識的**には自己弁護をしなかつたつもりだ。

最後に僕のこの原稿を特に君に托するのは君の恐らくは誰よりも僕を知つてゐると思ふからだ。（都会人と云ふ僕の皮を剥ぎさへすれば）どうかこの原稿の中に僕の阿呆さ加減を笑つてくれ給へ。

昭和二年六月二十日

芥川龍之介

久米正雄君

一 時代

それは或本屋の二階だつた。二十歳の彼は書棚にかけた西洋風の梯子はしこに登り、新しい本を探してゐた。モオバスサン、ボオドレエル、ストリントベリイ、イブセン、シヨウ、トルストイ、……

そのうちに目の暮は迫り出した。しかし彼は熱心に本の背文字を読みつづけた。そこに並んでゐるのは本といふよりも寧ろむし世紀末それ自身だつた。ニイチエ、ヴェルレーン、ゴンクウル兄弟、ダスタエフスキイ、ハウプトマン、フロオベール、……

彼は薄暗がりと戦ひながら、彼等の名前を数へて行つた。が、本はおのづからもの憂い影の中に沈みはじめた。彼はとうとう根気も尽き、西洋風の梯子を下りようとした。すると傘のない電燈が一つ、丁度彼の頭の上に突然ぽかりと火をともした。彼は梯子の上に佇たふすんだまま、本の間に動いてゐる店員や客を見下みおろした。彼等は妙に小さかつた。のみならず如何にも見すばらしかつた。

「人生は一行いっぎやうのボオドレエルにも若しかない。」

彼は暫く梯子の上からかう云ふ彼等を見渡してゐた。……

二 母

狂人たちは皆同じやうに鼠色の着物を着せられてゐた。広い部屋はその為に一層憂鬱に見えるらしかった。彼等の一人はオルガンに向ひ、熱心に讚美歌を弾きつづけてゐた。同時に又彼等の一人は丁度部屋のまん中に立ち、踊ると云ふよりも跳ねまはつてゐた。

彼は血色の善い医者としよにかう云ふ光景を眺めてゐた。彼の母も十年前には少しも彼等と変らなかつた。少しも、――彼は實際彼等の臭氣に彼の母の臭氣を感じた。

「ぢや行かうか？」

医者は彼の先に立ちながら、廊下伝ひに或部屋へ行つた。その部屋の隅にはアルコルを満した、大きい硝子の壺の中に脳髓が幾つも漬つてゐた。彼は或脳髓の上にかすかに白いものを発見した。それは丁度卵の白味をちよつと滴らしたのに近いものだつた。彼は医者と立ち話をしながら、もう一度彼の母を思ひ出した。

「この脳髓を持つてゐた男は××電燈会社の技師だつたがね。いつも自分を黒光りのする、大きいダイナモだと思つてゐたよ。」

彼は医者の目を避ける為に硝子窓の外を眺めてゐた。そこには空き罎の破片を植ゑた煉瓦塀の外に何もなかつた。しかしそれは薄い苔をまだらにばんやりと白らませてゐた。

三家

彼は或郊外の二階の部屋に寝起きしてゐた。それは地盤の緩い為に妙に傾いた二階だつた。

彼の伯母はこの二階に度たび彼と喧嘩をした。それは彼の養父母の仲裁を受けることもないことはなかつた。しかし彼は彼の伯母に誰よりも愛を感じてゐた。一生独身だつた彼の伯母はもう彼の二十歳の時にも六十に近い年よりだつた。彼は或郊外の二階に何度も互に愛し合ふものは苦しみ合ふのかを考へたりした。その間も何か気味の悪い二階の傾きを感じながら。

四 東京

隅田川はどんより曇つてゐた。彼は走つてゐる小蒸汽の窓から向う島の桜を眺めてゐた。花を盛つた桜は彼の目には一列の檻^{ぼろ}樓のやうに憂鬱だつた。が、彼はその桜に、——江戸以来の向う島の桜にいつか彼自身を見出してゐた。

五 我

彼は彼の先輩と一しよに或カツエの卓^{デスブル}子に向ひ、絶えず巻煙草をふかしてゐた。彼は余り口をきかなかつた。が、彼の先輩の言葉には熱心に耳を傾けてゐた。

「けふは半日自動車に乗つてゐた。」

「何か用があつたのですか？」

彼の先輩は頹杖ほろづゑをしたまま、極めて無造作に返事をした。

「何、唯乗つてゐたかつたから。」

その言葉は彼の知らない世界へ、——神々に近い「我」^がの世界へ彼自身を解放した。彼は何か痛みを感じた。が、同時に又飲よみこびも感じた。

そのカツフエは極小しごくさかつた。しかしパンの神の額がくの下には赭あかい鉢に植ゑたゴムの樹が一本、肉の厚い葉をだらりと垂らしてゐた。

六 病

彼は絶え間ない潮風の中に大きい英吉利語イギリスの辞書をひろげ、指先に言葉を探してゐた。

Talaria 翼の生えた靴、或はサンダル。

Tale 話。

Taipot 東印度に産する椰子やし。幹は五十呎フィートより百呎の高さに至り、葉は傘、扇、帽等に用ひらる。七十年に一度花を開く。……

彼の想像ははつきりとこの椰子の花を描き出した。すると彼は喉のどもとに今までに知らない痒かゆさを感じ、思はず辞書の上へ啖たんを落した。啖を？——しかしそれは啖ではなかつた。彼は短い命を思ひ、もう一度この椰子の花を想像した。この遠

い海の向うに高だかと聳えてゐる椰子の花を。

七画

彼は突然、——それは実際突然だった。彼は或本屋の店先に立ち、ゴオグの画集を見てゐるうちに突然画と云ふものを了解した。勿論そのゴオグの画集は写真版だったのに違ひなかった。が、彼は写真版の中にも鮮かに浮かび上る自然を感じた。

この画に対する情熱は彼の視野を新たにした。彼はいつか木の枝のうねりや女の頬の膨らみに絶え間ない注意を配り出した。

或雨を持った秋の日の暮、彼は或郊外のガアドの下を通りかかった。

ガアドの向うの土手の下には荷馬車が一台止まつてゐた。彼はそこを通りながら、誰か前にこの道を通つたもののあるのを感じ出した。誰か？——それは彼自身に今更問ひかける必要もなかった。二十三歳の彼の心の中には耳を切つた和蘭人が一人、長いパイプを啣へたまま、この憂鬱な風景画の上へちつと鋭い目を注いでゐた。……

八 火花

彼は雨に濡れたまま、アスファルトの上を踏んで行つた。雨は可かなり也烈しかつた。彼は水沫しぶきの満ちた中にゴム引の外套の匂を感じた。

すると目の前の架空線が一本、紫いろの火花を発してゐた。彼は妙に感動した。彼の上着のポケットは彼等の同人雑誌へ発表する彼の原稿を隠してゐた。彼は雨の中を歩きながら、もう一度後ろの架空線を見上げた。

架空線は不相変鋭い火花を放つてゐた。彼は人生を見渡しても、何も特に欲しいものはなかつた。が、この紫色の火花だけは、——あひかはらず凄まじい空中の火花だけは命と取り換へてもつかまへたかつた。

九 死体

死体は皆親指に針金のついた札をぶら下げてゐた。その又札は名前だの年齢だのを記してゐた。彼の友だちは腰をかがめ、器用にメスを動かしながら、或死体の顔の皮を剥はぎはじめた。皮の下に広がつてゐるのは美しい黄いろの脂肪だつた。

彼はその死体を眺めてゐた。それは彼には或短篇を、——王朝時代に背景を求めた或短篇を仕上げる為に必要だつたのに違ひなかつた。が、腐敗した杏あんずの匂に近い死体の臭気は不快だつた。彼の友だちは眉間みけんをひそめ、静かにメスを動かして行つた。

「この頃は死体も不足してね。」

彼の友だちはかう言つてゐた。すると彼はいつの間にか彼の答を用意してゐた。——「己は死体に不足すれば、何の悪意もなしに人殺しをするがね。」しかし勿論彼の答は心の中にあつただけだつた。

十 先生

彼は大きいの木の下に先生の本を読んでゐた。櫛の木は秋の日の光の中に一枚の葉さへ動さなかつた。どこか遠い空中に硝子の皿を垂れた秤^{はかり}が一つ、丁度平衡を保つてゐる。——彼は先生の本を読みながら、かう云ふ光景を感じてゐた。：

十一 夜明け

夜は次第に明けて行つた。彼はいつか或町の角に広い市場を見渡してゐた。市場に群^{むら}つた人々や車はいづれも薔薇色^{ばら}に染まり出した。

彼は一本の巻煙草に火をつけ、静かに市場の中へ進んで行つた。するとか細い黒犬が一匹、いきなり彼に吠えかかつた。

が、彼は驚かなかつた。のみならずその犬さへ愛してゐた。

市場のまん中には篠懸すかけが一本、四方へ枝をひろげてゐた。彼はその根もとに立ち、枝越しに高い空を見上げた。空には丁度彼の真上に星が一つ輝いてゐた。

それは彼の二十五の年、——先生に会つた三月目だつた。

十二 軍港

潜航艇の内部は薄暗かつた。彼は前後左右を蔽おほつた機械の中に腰をかがめ、小さい目金めがねを覗のぞいてゐた。その又目金に映つてゐるのは明るい軍港の風景だつた。「あそこに『金剛』も見えるでせう。」

或海軍将校はかう彼に話しかけたりした。彼は四角いレンズの上に小さい軍艦を眺めながら、なぜかふと阿蘭陀オランダ弁を思ひ出した。一人前三十銭のビイフ・ステエクの上にもかすかに匂つてゐる阿蘭陀弁を。

十三 先生の死

彼は雨上りの風の中に或新らしい停車場のプラットフオオムを歩いてゐた。空はまだ薄暗かつた。プラットフオオムの

向うには鉄道工夫が三四人、一斉に鶴嘴を上下させながら、何か高い声にうたつてゐた。

雨上りの風は工夫の唄や彼の感情を吹きちぎつた。彼は巻煙草に火もつけずに歎びに近い苦しみを感じてゐた。「センセイキトク」の電報を外套のポケットへ押しこんだまま。……

そこへ向うの松山のかげから午前六時の上り列車が、薄い煙を靡かせながら、うねるやうにこちらへ近づきはじめた。

十四 結婚

彼は結婚した翌日に「来無駄費ひをしては困る」と彼の妻に小言を言つた。しかしそれは彼の小言よりも彼の伯母の「言へ」と云ふ小言だつた。彼の妻は彼自身には勿論、彼の伯母にも詫びを言つてゐた。彼の為に買つて来た黄水仙の鉢を前にしたまま。……

十五 彼等

彼等は平和に生活した。大きい芭蕉の葉の広がったかげに。——彼等の家は東京から汽車でもたつぷり一時間かかる或

海岸の町にあつたから。

十六 枕

彼は薔薇の葉の匂のする懷疑主義を枕にしながら、アナトオル・フランスの本を読んでゐた。が、いつかその枕の中にも半身半馬神のあることには気づかなかつた。

十七 蝶

藻の匂の満ちた風の中に蝶が一羽ひらめいてゐた。彼はほんの一瞬間、乾いた彼の唇の上へこの蝶の翅つばさの触れるのを感じた。が、彼の唇の上へいつか捺なすつて行つた翅の粉だけは数年後にもまだきらめいてゐた。

十八 月

彼は或ホテルの階段の途中に偶然彼女に遭遇した。彼女の顔はかう云ふ昼にも月の光りの中にあるやうだつた。彼は彼

女を見送りながら、（彼等は一面識もない間がらだつた。）今まで知らなかつた寂しさを感じた。……

十九 人工の翼

彼はアナトオル・フランスから十八世紀の哲学者たちに移つて行つた。が、ルツソオには近づかなかつた。それは或は彼自身の一面、——情熱に駆られ易い一面のルツソオに近い為かも知れなかつた。彼は彼自身の他の一面、——冷かな理智に富んだ一面に近い「カンデイイド」の哲学者に近づいて行つた。

人生は二十九歳の彼にはもう少しも明るくはなかつた。が、ヴォルテエルはかう云ふ彼に人工の翼を供給した。

彼はこの人工の翼をひろげ、易やすと空へ舞ひ上つた。同時に又理智の光を浴びた人生の歎びや悲しみは彼の目の下へ沈んで行つた。彼は見すばらしい町々の上へ反語や微笑を落しながら、遮るもののない空中をまつ直に太陽へ登つて行つた。丁度かう云ふ人工の翼を太陽の光りに焼かれた為にととうとう海へ落ちて死んだ昔の希臘人も忘れたやうに。……

二十 械

彼等夫妻は彼の養父母と一つ家に住むことになつた。それは彼が或新聞社に入社することになつた為だつた。彼は黄い

ろい紙に書いた一枚の契約書を力にしてゐた。が、その契約書は後になつて見ると、新聞社は何の義務も負はずに彼ばかり義務を負ふものだった。

二十一 狂人の娘

二台の人力車は人氣のない曇天の田舎道を走つて行つた。その道の海に向つてゐることは潮風の来るのでも明らかだつた。後の人力車に乗つてゐた彼は少しもこのランデ・ブウに興味のないことを怪みながら、彼自身をここへ導いたものの何であるかを考へてゐた。それは決して恋愛ではなかつた。若し恋愛でないとすれば、——彼はこの答を避ける為に「兎に角我等は対等だ」と考へない訣には行かなかつた。

前の人力車に乗つてゐるのは或狂人の娘だつた。のみならず彼女の妹は嫉妬の為に自殺してゐた。

「もうどうにも仕かたはない。」

彼はもうこの狂人の娘に、——動物的本能ばかり強い彼女に或憎悪を感じてゐた。

二台の人力車はその間に磯臭い墓地の外へ通りかかつた。蠣殻かきがらのついた粗朶垣そだがきの中には石塔が幾つも黒んでゐた。彼はそれ等の石塔の向うにかすかにかがやいた海を眺め、何か急に彼女の夫を——彼女の心を捉へてゐない彼女の夫を輕蔑し出した。……

二十二 或画家

それは或雑誌のし画^えだつた。が、一羽の雄鶏の墨画^{すみゑ}は著しい個性を示してゐた。彼は或友だちにこの画家のことを尋ねたりした。

一週間ばかりたつた後、この画家は彼を訪問した。それは彼の一生のうちでも特に著しい事件だつた。彼はこの画家の中に誰も知らない詩を発見した。のみならず彼自身も知らずにゐた彼の魂を発見した。

或薄ら寒い秋の日の暮、彼は一本の唐黍^{からきび}に忽ちこの画家を思ひ出した。丈の高い唐黍は荒あらしい葉をよろつたまま、盛り土の上には神経のやうに細ぼそと根を露^{あら}はしてゐた。それは又勿論傷き易い彼の自画像にも違ひなかつた。しかしかう云ふ発見は彼を憂鬱にするだけだつた。

「もう遅い。しかしいざとなつた時には……」

二十三 彼女

或広場の前は暮れかかつてゐた。彼はやや熱のある体にこの広場を歩いて行つた。大きいビルディングは幾棟^{むか}もかすかに銀色に澄んだ空に窓々の電燈をきらめかせてゐた。

彼は道ばたに足を止め、彼女の来るのを待つことにした。五分ばかりたつた後、彼女は何かやつれたやうに彼の方へ歩

み寄つた。が、彼の顔を見ると、「疲れたわ」と言つて頬笑んだりした。彼等は肩を並べながら、薄明い広場を歩いて行つた。それは彼等には始めてだつた。彼は彼女と一しよにゐる為には何を捨てても善い氣もちだつた。

彼等の自動車に乗つた後、彼女はぢつと彼の顔を見つめ、「あなたは後悔なさらない？」と言つた。彼はきつぱり「後悔しない」と答へた。彼女は彼の手を抑へ、「あたしは後悔しないけれども」と言つた。彼女の顔はかう云ふ時にも月の光の中にゐるやうだつた。

二十四 出産

彼は襖側に佇んだまま、白い手術着を着た産婆が一人、赤児を洗ふのを見下してゐた。赤児は石鹼の目にしみる度にいぢらしい顰め顔を繰り返した。のみならず高い声に啼きつづけた。彼は何か鼠の仔に近い赤児の匂を感じながら、しみじみかう思はずにはゐられなかつた。――「何の為にこいつも生まれて来たのだらう？ この娑婆苦の充ち満ちた世界へ。」

――何の為に又こいつも己のやうなものを父にする運命を荷つたのだらう？」

しかもそれは彼の妻が最初に出産した男の子だつた。

二十五 ストリントベリイ

彼は部屋の戸口に立ち、柘榴ざくろの花のさいた月明りの中に薄汚い支那人が何人か、麻雀戯マアチアンをしてゐるのを眺めてゐた。それから部屋の中へひき返すと、背の低いランプの下に「痴人の告白」を読みはじめた。が、二頁ページも読まないうちにいつか苦笑を洩らしてゐた。——ストリントベリイも亦情人だつた伯爵夫人へ送る手紙の中に彼と大差のないを書いてゐる。……

二十六 古代

彩色の剥はげた仏たちや天人や馬や蓮の華はなは殆ど彼を圧倒した。彼はそれ等を見上げたまま、あらゆることを忘れてゐた。狂人の娘の手を脱した彼自身の幸運さへ。……

二十七 スパルタ式訓練

彼は彼の友だちと或裏町を歩いてゐた。そこへ幌ほろをかけた人力車が一台、まっ直すぐに向うから近づいて来た。しかもその上に乗つてゐるのは意外にも昨夜の彼女だつた。彼女の顔はかう云ふ昼にも月の光の中にゐるやうだつた。彼等は彼の友

だちの手前、勿論挨拶さへ交さなかつた。

「美人ですね。」

彼の友だちはこんなことを言つた。彼は往來の突き当りにある春の山を眺めたまま、少しもためらはずに返事をした。
「ええ、中々美人ですね。」

二十八 殺人

田舎道は日の光りの中に牛の糞の臭気を漂はせてゐた。彼は汗を拭ひながら、爪先き上りの道を登つて行つた。道の両側に熟した麦は香ばしい匂を放つてゐた。

「殺せ、殺せ。……」

彼はいつか口の中にかう云ふ言葉を繰り返してゐた。誰を？——それは彼には明らかだつた。彼は如何にも卑屈らしい五分刈の男を思ひ出してゐた。

すると黄ばんだ麦の向うに羅馬カトリック教の伽藍ロオマが一字、いつの間にか円屋根がらん いちう まるやねを現し出した。……

二十九 形

それは鉄の銚子だった。彼はこの糸目のついた銚子にいつか「形」の美を教へられてゐた。

三十 雨

彼は大きいベッドの上に彼女といろいろの話をしてみた。寢室の窓の外は雨ふりだった。浜木棉の花はこの雨の中にいつか腐つて行くらしかった。彼女の顔は不相変月の光の中にゐるやうだった。が、彼女と話してゐることは彼には退屈でないこともなかった。彼は腹這ひになつたまま、静かに一本の巻煙草に火をつけ、彼女と一しよに日を暮らすのも七年になつてゐることを思ひ出した。

「おれはこの女を愛してゐるだらうか？」

彼は彼自身にかう質問した。この答は彼自身を見守りつけた彼自身にも意外だった。

「おれは未だに愛してゐる。」

三十一 大地震

それはどこか熟し切つた杏あんずの匂におに近いものだつた。彼は焼けあとを歩きながら、かすかにこの匂を感じ、炎天に腐つた死骸の匂も存外悪くないと思つたりした。が、死骸の重なり重かさなつた池の前に立つて見ると、「酸鼻さんび」と云ふ言葉も感覚的に決して誇張でないことを発見した。殊に彼を動かしたのは十三歳の子供の死骸だつた。彼はこの死骸を眺め、何か羨ましさに近いものを感じた。「神々に愛せらるるものは夭折えうせつす」——かう云ふ言葉なども思ひ出した。彼の姉や異母弟はいづれも家を焼かれてゐた。しかし彼の姉の夫は偽証罪を犯した為に執行猶予中の体だつた。……

「誰も彼も死んでしまへば善いい。」

彼は焼け跡に佇たたずんだまま、しみじみかう思はずにはゐられなかつた。

三十二 喧嘩

彼は彼の異母弟と取り組み合ひの喧嘩をした。彼の弟は彼の為に圧迫を受け易いのに違ひなかつた。同時に又彼も彼の弟の為に自由を失つてゐるのに違ひなかつた。彼の親戚は彼の弟に「彼を見慣みなへ」と言ひつづけてゐた。しかしそれは彼自身には手足を縛られるのも同じことだつた。彼等は取り組み合つたまま、とうとう縁先へ転ころげて行つた。縁先の庭には百日紅さるすべりが一本、——彼は未だに覚えてゐる。——雨を持つた空の下に赤光りに花を盛り上げてゐた。

三十三 英雄

彼はヴォルテエルの家の窓からいつか高い山を見上げてゐた。氷河の懸つた山の上には禿鷹はげたかの影さへ見えなかつた。が、背の低い露西亞ロシア人が一人、執拗しつとに山道を登りつづけてゐた。

ヴォルテエルの家も夜になつた後、彼は明るいランプの下にかう云ふ傾向詩を書いたりした。あの山道を登つて行つた露西亞人の姿を思ひ出しながら。……

——誰よりも十戒を守つた君は

誰よりも十戒を破つた君だ。

誰よりも民衆を愛した君は

誰よりも民衆を軽蔑した君だ。

誰よりも理想に燃え上つた君は

誰よりも現実を知つてゐた君だ。

君は僕等の東洋が生んだ

草花の匂のする電気機関車だ。——

三十四 色彩

三十歳の彼はいつの間か或空き地を愛してゐた。そこには唯^{こけ}苔の生えた上に煉瓦や瓦の欠片^{かけら}などが幾つも散らかつてゐるだけだつた。が、それは彼の目にはセザンヌの風景画と變りはなかつた。

彼はふと七八年前の彼の情熱を思ひ出した。同時に又彼の七八年前には色彩を知らなかつたのを發見した。

三十五 道化人形

彼はいつ死んでも悔いないやうに烈しい生活をするつもりだつた。が、不相^{あひかわらず}變養父母や伯母に遠慮勝ちな生活をつづけてゐた。それは彼の生活に明暗の両面を造り出した。彼は或洋服屋の店に道化人形の立つてゐるのを見、どの位彼も道化人形に近いかと云ふことを考へたりした。が、意識の外の彼自身は、——言はば第二の彼自身はとうにかう云ふ心もちを或短篇の中に盛りこんでゐた。

三十六 倦怠

彼は或大学生と芒原すすきはらの中を歩いてゐた。

「君たちはまだ生活慾を盛に持つてゐるだらうね？」

「ええ、——だつてあなたでも……」

「ところが僕は持つてゐないんだよ。制作慾だけは持つてゐるけれども。」

それは彼の真情だつた。彼は實際いつの間にか生活に興味を失つてゐた。

「制作慾もやつぱり生活慾でせう。」

彼は何とも答へなかつた。芒原はいつか赤い穂の上にはつきりと噴火山を露し出した。彼はこの噴火山に何か羨望せんぼうに近いものを感じた。しかしそれは彼自身にもなぜと云ふことはわからなかつた。……

三十七 越し人

彼は彼と才力の上にも格闘出来る女に遭遇した。が、「越し人」等の抒情詩を作り、僅わずかかにこの危機を脱出した。それは何か木の幹に凍つた、かがやかしい雪を落すやうに切ない心もちのするものだつた。

風に舞ひたるすげ笠の

何かは道に落ちざらん

わが名はいかで惜しむべき

惜しむは君が名のみとよ。

三十八 復讐

それは木の芽の中にある或ホテルの露台だつた。彼はそこに画を描きながら、一人の少年を遊ばせてゐた。七年前に絶縁した狂人の娘の一人息子と。

狂人の娘は巻煙草に火をつけ、彼等の遊ぶのを眺めてゐた。彼は重苦しい心もちの中に汽車や飛行機を描きつづけた。少年は幸ひにも彼の子ではなかつた。が、彼を「をぢさん」と呼ぶのは彼には何よりも苦しかつた。

少年のどこかへ行つた後、狂人の娘は巻煙草を吸ひながら、媚びるやうに彼に話しかけた。

「あの子はあなたに似てゐやしない？」

「似てゐません。第一……」

「だつて胎教と云ふこともあるでせう。」

彼は黙つて目を反らした。が、彼の心の底にはかう云ふ彼女を絞め殺したい、残酷な欲望さへない訣ではなかつた。

…

三十九 鏡

彼は或カツフエの隅に彼の友だちと話してゐた。彼の友だちは焼林檎やきりんごを食ひ、この頃の寒さの話などをした。彼はかう云ふ話の中に急に矛盾を感じ出した。

「君はまだ独身だつたね。」

「いや、もう来月結婚する。」

彼は思はず黙つてしまつた。カツフエの壁に嵌めこんだ鏡は無数の彼自身を映してゐた。冷えびえと、何か脅すやうに……

四十 問答

なぜお前は現代の社会制度を攻撃するか？

資本主義の生んだ悪を見てゐるから。

悪を？ おれはお前は善悪の差を認めてゐないと思つてゐた。ではお前の生活は？

——彼はかう天使と問答した。尤も誰にも恥づる所のないシルクハットをかぶつた天使と。……

四十一 病

彼は不眠症に襲はれ出した。のみならず体力も衰へはじめた。何人かの医者は彼の病にそれぞれ二三の診断を下した。

——胃酸過多、胃アトニー、乾性肋膜炎、神経衰弱、慢性結膜炎、脳疲労、……

しかし彼は彼自身彼の病源を承知してゐた。それは彼自身を恥ぢると共に彼等を恐れる心もちだつた。彼等を、——彼の軽蔑してゐた社会を！

或雪曇りに曇つた午後、彼は或カツエの隅に火のついた葉巻を啣へたまま、向うの蓄音機から流れて来る音楽に耳を傾けてゐた。それは彼の心もちに妙にしみ渡る音楽だつた。彼はその音楽の了るのを待ち、蓄音機の前へ歩み寄つてレコードの貼り札を検べることにした。

Magic Flute——Mozart

彼は咄嗟に了解した。十戒を破つたモツツアルトはやはり苦しんだのに違ひなかつた。しかしよもや彼のやうに、……彼は頭を垂れたまま、静かに彼の卓子へ歸つて行つた。

四十二 神々の笑ひ声

三十五歳の彼は春の日の当つた松林の中を歩いてゐた。二三年前に彼自身の書いた「神々は不幸にも我々のやうに自殺出来ない」と云ふ言葉を思ひ出しながら、……

四十三 夜

夜はもう一度迫り出した。荒れ模様の海は薄明りの中に絶えず水沫を打ち上げてゐた。彼はかう云ふ空の下に彼の妻と二度目の結婚をした。それは彼等には歎びだつた。が、同時に又苦しみだつた。三人の子は彼等と一しよに沖の稲妻を眺めてゐた。彼の妻は一人の子を抱き、涙をこらへてゐるらしかつた。

「あすここに船が一つ見えるね？」

「ええ。」

「ほばしる。」「橋の二つに折れた船が。」

四十四 死

彼はひとり寝てゐるのを幸ひ、窓格子に帯をかけて縊死しようとした。が、帯に頸を入れて見ると、俄かに死を恐れ出した。それは何も死ぬ刹那の苦しみの為に恐れたものではなかつた。彼は二度目には懷中時計を持ち、試みに縊死を計ることにした。するとちよつと苦しかつた後、何も彼もぼんやりなりはじめた。そこを一度通り越しさへすれば、死にはひつ

てしまふのに違ひなかつた。彼は時計の針を^と検べ、彼の苦しみを感じたのは一分二十何秒かだつたのを発見した。窓格子の外はまっ暗だつた。しかしその暗^{ぐみ}の中に荒あらしい鶏の声もしてゐた。

四十五 Divan

Divan はもう一度彼の心に新しい力を与へようとした。それは彼の知らずにゐた「東洋的なゲエテ」だつた。彼はあらゆる善悪の彼岸に悠々と立つてゐるゲエテを見、絶望に近い羨ましさを感じた。詩人ゲエテは彼の目には詩人クリストよりも偉大だつた。この詩人の心にはアクロポリスやゴルゴタの外にアラビアの薔薇さへ花をひらいてゐた。若しこの詩人の足あとを辿^{たど}る多少の力を持つてゐたらば、——彼はデイヴアンを^を読みとり、恐しい感動の静まつた後、しみじみ生活的^{くわんぐわん}宦官に生まれた彼自身を輕蔑せずにはゐられなかつた。

四十六 嘘

彼の姉の夫の自殺は俄かに彼を打ちのめした。彼は今度は姉の一家の面倒も見なければならなかつた。彼の将来は少くとも彼には日の暮のやうに薄暗かつた。彼は彼の精神的破産に冷笑に近いものを感じながら、(彼の悪徳や弱点は一つ残ら

ず彼にはわかつてゐた。) 不相変いろいろの本を読みつづけた。しかしルツソオの懺悔録さへ英雄的なにうち満ちてゐた。殊に「新生」に至つては、——彼は「新生」の主人公ほど老獪な偽善者に出会つたことはなかつた。が、フランソア・ヴィヨンだけは彼の心にしみ透つた。彼は何篇かの詩の中に「美しい牡」を発見した。

絞罪を待つてゐるヴィヨンの姿は彼の夢の中にも現れたりした。彼は何度もヴィヨンのやうに人生のどん底に落ちようとした。が、彼の境遇や肉体的エネルギーはかう云ふことを許す訣はなかつた。彼はだんだん衰へて行つた。丁度昔スウィフトの見た、木末から枯れて来る立ち木のやうに。……

四十七 火あそび

彼女はかがやかしい顔をしてゐた。それは丁度朝日の光の薄氷にさしてゐるやうだつた。彼は彼女に好意を持つてゐた。しかし恋愛は感じてゐなかつた。のみならず彼女の体には指一つ触らずにゐたのだつた。

「死にたがつていらつしやるのですつてね。」

「ええ。——いえ、死にたがつてゐるよりも生きることには飽きてゐるのです。」

彼等はかう云ふ問答から一しよに死ぬことを約束した。

「プラトニツク・スウィサイドですね。」

「ダブル・プラトニツク・スウィサイド。」

彼は彼自身の落ち着いてゐるのを不思議に思はずにはゐられなかつた。

四十八 死

彼は彼女とは死ななかつた。唯未だに彼女の体に指一つ触つてゐないことは彼には何か満足だつた。彼女は何ごとにもかつたやうに時々彼と話したりした。のみならず彼に彼女の持つてゐた青酸加里を一罈渡し、「これさへあればお互に力強いでせう」とも言つたりした。

それは實際彼の心を丈夫にしたのに違ひなかつた。彼はひとり藤椅子に坐り、椎の若葉を眺めながら、度々死の彼に与へる平和を考へずにはゐられなかつた。

四十九 剥製の白鳥

彼は最後の力を尽し、彼の自叙伝を書いて見ようとした。が、それは彼自身には存外容易に出来なかつた。それは彼の自尊心や懷疑主義や利害の打算の未だに残つてゐる為だつた。彼はかう云ふ彼自身を輕蔑せずにはゐられなかつた。しかし又一面には「誰でも一皮剥いて見れば同じことだ」とも思はずにはゐられなかつた。「詩と眞実と」と云ふ本の名前は彼にはあらゆる自叙伝の名前のやうにも考へられ勝ちだつた。のみならず文芸上の作品に必しも誰も動かされないのは彼にははつきりわかつてゐた。彼の作品の訴へるものは彼に近い生涯を送つた彼に近い人々の外にある筈はない。——かう云ふ氣も彼には働いてゐた。彼はその為に手短かに彼の「詩と眞実と」を書いて見ることにした。

彼は「或阿呆の一生」を書き上げた後、偶然或古道具屋の店に剥製の白鳥のあるのを見つけた。それは頸を挙げて立つてゐたものの、黄ばんだ羽根さへ虫に食はれてゐた。彼は彼の一生を思ひ、涙や冷笑のこみ上げるのを感じた。彼の前にあるものは唯発狂か自殺かだけだつた。彼は日の暮の往来をたつた一人歩きながら、徐ろに彼を滅しに来る運命を待つことに決心した。

五十 俘とりこ

彼の友だちの一人は発狂した。彼はこの友だちにいつも或親しみを感じてゐた。それは彼にはこの友だちの孤独の、――軽快な仮面の下にある孤独の人一倍身にしてみてわかる為だつた。彼はこの友だちの発狂した後、二三度この友だちを訪問した。

「君や僕は悪鬼につかれてゐるんだね。世紀末の悪鬼と云ふやつにねえ。」

この友だちは声をひそめながら、こんなことを彼に話したりしたが、それから二三日後には或温泉宿へ出かける途中、薔薇の花さへ食つてゐたと云ふことだつた。彼はこの友だちの入院した後、いつか彼のこの友だちに贈つたテラコッタの半身像を思ひ出した。それはこの友だちの愛した「檢察官」の作者の半身像だつた。彼はゴオリイも狂死したのを思ひ、何か彼等を支配してゐる力を感じずにはゐられなかつた。

彼はすっかり疲れ切つた揚句、ふとラディゲの臨終の言葉を読み、もう一度神々の笑ひ声を感じた。それは「神の兵卒たちは己をつかまへに来る」と云ふ言葉だつた。彼は彼の迷信や彼の感傷主義と闘はうとした。しかしどう云ふ闘ひも肉

体的に彼には不可能だった。「世紀末の悪鬼」は實際彼を虐^{さいな}んでゐるのに違ひなかつた。彼は神を力にした中世紀の人々に羨しさを感^{かん}じた。しかし神を信ずることは——神の愛を信ずることは到底彼には出来なかつた。あのコクトオさへ信じ
た神を！

五十一 敗北

彼はペンを執^とる手も震へ出した。のみならず涎^{よだれ}さへ流れ出した。彼の頭は○・八のヴェロナアルを用ひて覺めた後の外は一度もはつきりしたことはなかつた。しかもはつきりしてゐるのはやつと半時間か一時間だった。彼は唯薄暗い中にその日暮らしの生活をしてゐた。言はば刃のこぼれてしまつた、細い劍を杖にしなが

（昭和二年六月、遺稿）

出典

「羅生門」

芥川龍之介全集1

出版社…ちくま文庫、筑摩書房

初版発行日…1986（昭和61）年9月24日

「或る阿呆の一生」

現代日本文學大系 43 芥川龍之介集

出版社…筑摩書房

初版発行日…1968（昭和43）年8月25日

JETDA personal publications

芥川龍之介作品集

2021年xx月xx日 発行

著 者 芥川龍之介
発行者 長尾貴憲
発 行 一般社団法人日本電子書籍技術普及協会
〒531-0001
大阪府大阪市北区梅田 1-11-4-1000
大阪駅前第4ビル10階
電話 06-6131-8951

JETDA personal publications (ジェットダ・パーソナル・パブリケーションズ) は
出版を支援する取り組みとして図書コード (ISBN) の発行を行っております。
製本品質および作品内容について当協会は一切の責任を負いかねます。

©Ryunosuke akutagawa, JETDA 2021
ISBN978-4-000000-xx-x C0093

※本データはサンプルとして制作されています。
許可なく、第三者に譲渡することを禁止いたします。